

平成26年度(2014年度)スジエビ接岸状況モニタリング調査

井戸本 純一

1. 目的

近年漁獲量が減少している琵琶湖産スジエビの資源動向を把握し、原因究明と漁況予測につなげるため、湖岸で簡易なトラップを用いた親エビのモニタリング調査を実施した。

2. 方法

水産試験場の船溜まりに沈めた3つの箱形トラップで来遊する生物を捕獲し、甲殻類をホルマリン固定した。スジエビは抱卵の有無、腹節側甲の発達状況および腹肢の形状から雌雄を判別したのち、CCD方式のスキヤナーでデジタル画像化し、画像解析ソフトを使って頭胸甲長(CL)を測定した。

3. 結果

2014年のトラップ近傍(水深約4m)の湖水温は、2013年とくらべて4月から5月にかけて断続的に高い期間があったが、6月にはほぼ同じような推移を示した(図1)。

スジエビは4月中旬に増えはじめ、5月中旬には前年ピーク時の数に達し、6月中旬にはさらに2倍の数が捕獲された(図2)。4月に捕獲された個体は大部分が未抱卵と思われる雌で、5月中旬以降は抱卵した雌とすでに放卵したと思われる雌が増えた。7月に捕獲された個体は大部分が雄であった(図3)。

体型別に性比をみると、CL=7mm以下は大部分が雄であったが、CL=7mm以上はほとんどが雌で、およそ半数以上が抱卵していた(図4)。最小の抱卵個体はCL=6.38mmであった。

捕獲されたスジエビ全体の体型組成は、前年と同様おおむね正規分布を示したが、全体として大きく、CLの中央値は2012年の6.82mm、2013年の7.38mmに対して8.46mmとなり、前年から当年にかけて成長が比較的良好であったことがうかがわれた(図5)。

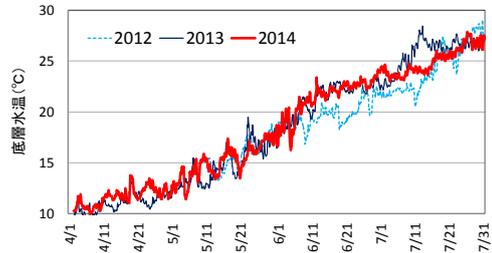


図1 トラップ周辺の水温変化(2時間間隔)。

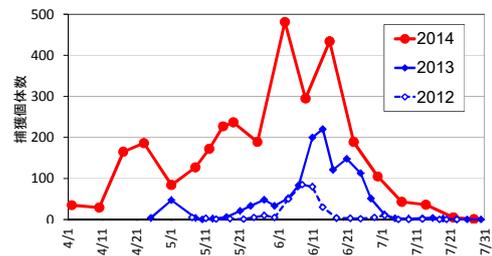


図2 スジエビ捕獲個体数の推移。

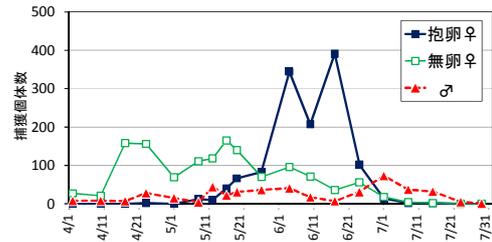


図3 2014年のスジエビ性別捕獲数の推移。

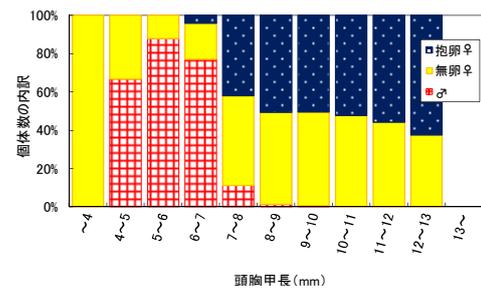


図4 スジエビ捕獲個体の体型別雌雄の内訳。

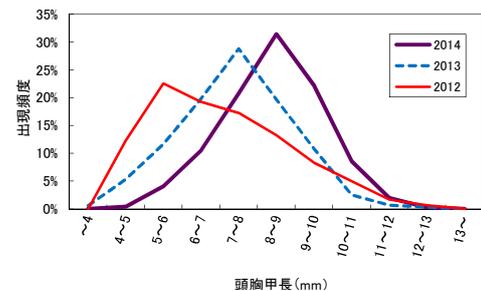


図5 スジエビ捕獲個体の体型組成の推移。